

赤い実のめでたさ

名の由来「千両・万両」

中国の古い植物名に「百両金」というのがある。日本では、江戸時代の初めに中国から渡った「本草綱目」によって、我が国の園芸家はこれをカラタチバナに当てた。センリョウはカラタチバナに似て、形が大きいので、百両金に対して千両といったもの。マンリョウは、千両に対して万両といったもので、かなり後の江戸中期のことらしい。

—「木の名の由来」(東書選書)より抜粋—

1. 萬両＝マンリョウ

日本では照葉樹林内の低木として生育するヤブコウジ属の木ですが、打吹山に生育するものは自生ではないようです。大部分は赤い実が付く野生型のもので、白い実の木も見られますが、斑入りなど競争に弱い園芸品種はみられません。庭木としてよく栽培され、積雪時にツグミやヒヨドリ、ジョウビタキ等によって食べられた種子が糞と一緒に散布されます。果皮は発芽を抑制する物質を含むため、動物に食べられるのを待つ実です。緑の中で赤くなって存在を示すのですが、鳥の選択は一番最後です。美味しくないのでしょう。



2. 千両＝センリョウ



太平洋側の暖地の照葉樹林下に自生するセンリョウ科の原始的な植物で、打吹山にはマンリョウ同様に、鳥により持ち込まれたと考えられます。個体数は少なく、庭木としての栽培数が少ないためと思われます。黄実の品種が生育している場所もあります。

3. 百両＝カラタチバナ

打吹山に自生するヤブコウジ属の木で、マンリョウより葉は大きく細長いのですが、実は少ししか実りません。江戸時代に園芸品種が多々作られました。



4. 十両＝ヤブコウジ



シイ林の下草をなす小低木。ヤブコウジが生育していれば、シイが生えていなくてもかつてシイ林が存在していた証拠になる指標植物です。地下茎が発達し、群落を作ります。果実は葉の下に1～2個付く程度です。江戸時代に園芸品種が多く作られ、大金で売買されました。

5. 一両＝アリドウシ

暖地のアカネ科小低木で、打吹山には生育していません。アリも突き刺せるほどの細長く鋭い棘をもっています。

